

雪の時間

楊楚豪

二十年前

雪が降り積もっていた

私は滑り台の下に立っていた

厚着をした体が、冷気を感じて

両親の笑い声が、家の中で響き渡っていた

滑り台の頂上で、私はただひとつの挑戦を前にしていた

目の前の雪景色が心に積もっていく

雪は白く、広がる空に溶け込んで

私を包み込んでいた

滑り台を滑り降り

風が肌を刺し

雪の上で派手に転んだ

この瞬間が、記憶の中で

生き続ける

百年後を考える

未来の雪はどうなるだろうか

この街が、冷たく、変わらずに残るのか

消えていくのか、誰にもわからない

今、私が立つこの場所も

過去の記憶と未来の夢が交錯する

瞬間の中に埋め込まれた時間の層が
無限に広がって

私を包み

社会の中で私たちが描くこの「瞬間」が
歴史の中で形作られていく

答えはまだ見えない

過去の雪の中で転がる私が
未来の雪の中で転がるのを
この瞬間の中で見つめて